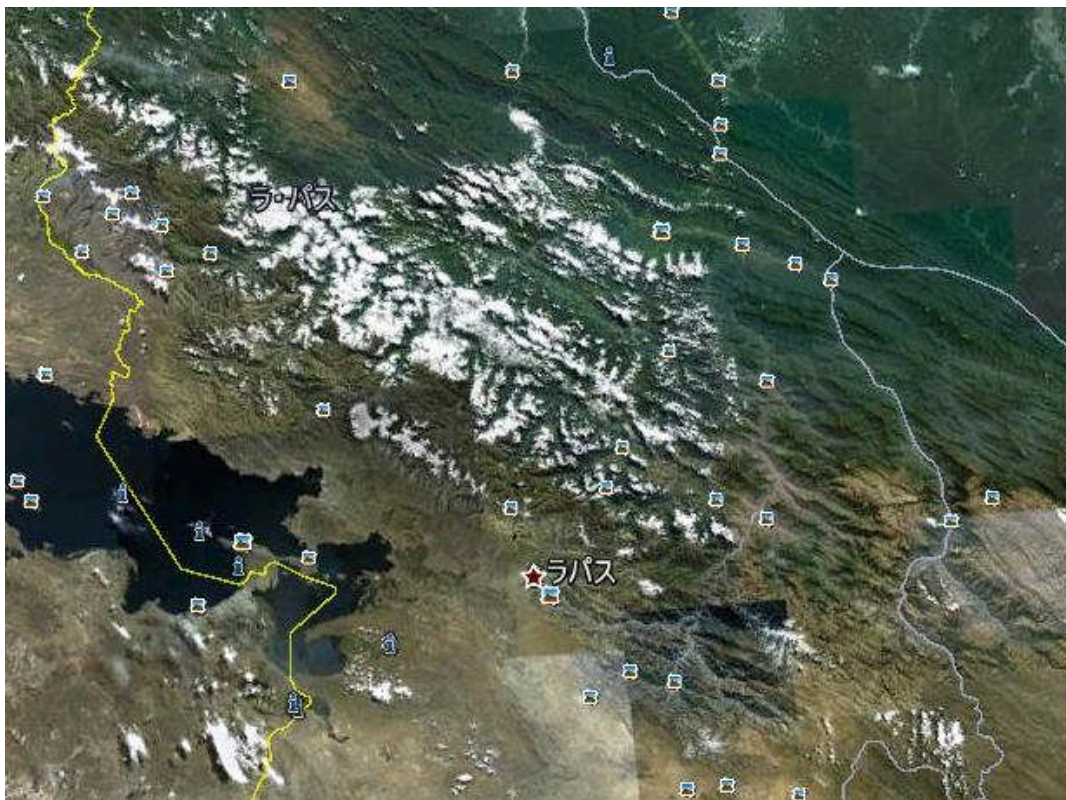


個人山行「南米ボリビア国 ワイナポトシ登頂と周辺トレッキング」報告

中道 宏

1. 発端

独自にボリビア・アンデス遠征を計画していた中道がその高度順化行程を会の海外山行案の一つとして検討の席で提案した。遠いうえに費用対効果値が低い等で採用にならなかった(これは正解)が、帰途坂井が個人山行として関心を示し、大塚、古林が乗り、すぐチームを編成し、情報の収集、手配等を始めた。準備は効率的に進んだが、出発直前に不慮の事故で唯一の 60 歳台の大塚が参加できなくなったのは、まことに残念であった。



アンデス山脈の一部レアル山群は図上の北西端イリャンプーから南東端イリマニまで測ると 134km ある。この中心が今回の山行の舞台である。左にチチカカ湖で、右上はアマゾンである。

2. 計画の前提と骨子

計画に当たっては

- ア. 登山基地となるラパスは空港が 4090m、街の中心が 3600m と標高が高いので、まずラパスへの高度順化に配慮する、

イ．老齢であるので、ゆっくりした日程で、ゆっくり歩くことでガイド会社と調整する、
ウ．経済性から個人手配とする、
を前提とし、

ア、3600m までの順化は個人の対応に任せ、ラパスに集合しチームを編成する（古林、中道はチチカカ湖観光で順化、坂井は三浦ドルフィンで順化を選択）、
イ、日程は次のようにゆっくりし、

6 月 14 日 集合

15 日 休養、準備

16 日 ラパス発 コンドリイリイ BC(4600m)露営

17 日 BC から CoVentananani(5408m)往復

18 日 ワイナポトシに向けトレッキング 露営(4600m)

19 日 ワイナポトシ小屋までトレッキング 小屋泊(4700m) 個室

20 日 休養

21 日 HC へ 小屋泊(5300m)

22 日 アイスクライミング(日程調整予備日)

23 日 ワイナポトシ(6088m)登頂、下山し、ラパスへ

ウ．全行程空荷で歩く、

エ．ガイド会社は東京医科大学増山教授にご紹介いただいた医師、登山家でガイド会社を
経営する Dr.Hugo の経営する Huayna Potosi Travel and Mountain School とし、都
合数十回のメールを交換した、

カ．登山基地となるラパスのホテルは、Web 情報、ラパス在勤の友人の情報から日本人家族
が経営する一番ホテルとする、
計画にした。

また登山保険については日本のそれは 1 年半前から 5 倍に上がり、何度か加入したデン
マークや今回のボリビアのそれは年齢制限がそれぞれ 69 歳、65 歳と設けられており、残念
ながら今回は保険に加入しなかった。

3. Air Canada の受託荷物が行不明

成田～トロント～リマを Air Canada を利用したが、坂井の荷物がリマに届かない。面に出さないが、本人の落ち込みは相当なものだったと思う。これを Dr.Hugo と一番ホテル経営者南雲さんが相当に応援し、

- ・ガイド会社で装備を借りる(外国人には当初からその予定のものがいる)
- ・トレッキングではアイゼンを使わないコースを採る
- ・ホテルに届いた荷物はワイナポトシ小屋に送る

ことで、トレッキングに出発した。

4. コンドリイリの美しさ

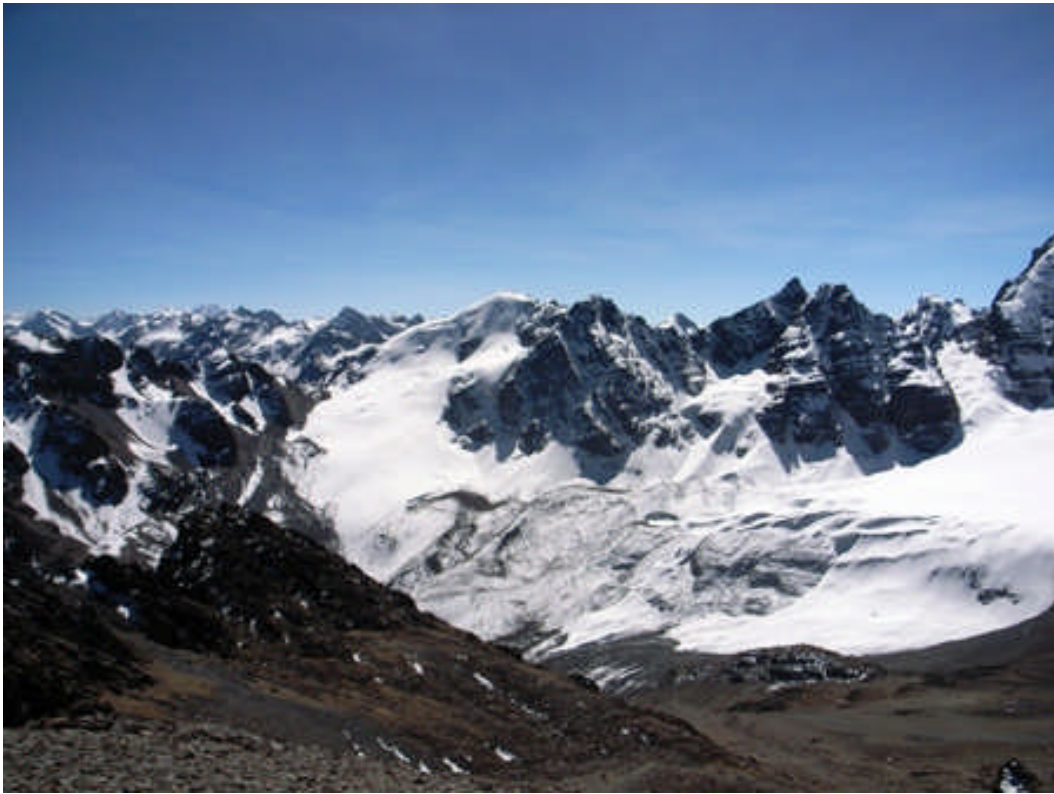
トレッキング初日はコンドルが羽を休めた姿のコンドリイリの麓の湖まで、2 時間半の歩きである。



5. レアル山群の展望台 Co Ventanani(5408) 往復

坂井は風邪、古林は下痢で、Dr.Hugo の診察と投薬を受け、休養。

標高も名前も定かでないこの山は、槍穂を観る蝶・常念のように、コンドリイリを真正面に観、レアル山群全体を見渡すことができる。



イリャンプー等西北方面



コンドリイリイも美しいが、ここから墜ちる氷河はあたかも流れているように見える。

6. コンドリイリイに別れ、ワイナポトシに向う

名ドクターの処置と患者の気力で 2 人は回復した。ただし用心して山間の道でなく、山麓の道をトレッキングする。

アルパカ、リャマ、ヒツジ、牛が枯れ草を食むのどかの風景のなかを、コンドリイリイに別れ、ワイナポトシに近づく。



これは北峰で登るのは南峰である。

7. 4つの峠を越え、ワイナポトシ南峰東面に廻り込む

今日は長いが、1 日中ワイナポトシの変化を愉しみながら、





Dr. Hugo が経営するワイナポトシ小屋に入る。シャワーもあり、個室であり、まことに良い位置に建っている。



8. 1 日間休養し、HC へ上がる

坂井の装備も届き、古林は二重靴、アイゼンをレンタルし、荷揚げの装備を整え、ルートを確認し、ガイドとの組み合わせを決め、1 日間休養する。

窓際の陽だまりでのんびりしながら、次のことを確認した。

ア. 予備日のアイスクライミングは中止し、登頂を 1 日早める。

イ. 登頂日の行動は

- ・ガイドに従うが、スピードについては **slow** に徹する、
- ・3 者の順番については一切気にしない、
- ・登頂まで写真を撮らない、また保温のためカメラをザックに仕舞う、
- ・どんなに苦しくてもガイドが降りようと言わない限り諦めない。

ウ. ガイドとポーターへの謝礼を統一する。

ここで SpO₂ を測ると坂井が 97, 古林と中道が 90 と信じられないくらいの高い数値である。

HC への登りは標高差 600m であるが、決して楽ではない。



遠くにイリマニが浮かんだように見える

雪面で二重靴を履き、アイゼンを着ける。靴が合わない古林が苦勞する。

HC は狭いが、想像したよりゆったりしている。

明日は 11 時半起床、1 時発。同行程の仏人若者は 2 時発とのこと。老齡加算？である。

9. ワイナポトシへ

SpO₂ を測ると 3 人とも 70 前後と悪い。古林は靴の不具合から登頂を断念し、坂井、中道がそれぞれガイドと発つ。

風がなくて有り難いが、最初から急登でつらいうえに、眠い。ガイドは無灯で平気に歩いているが、ヘッドランプを途中でもう一つのセットに替えた。

段々つらくなり、50 歩で一呼吸入れることを繰り返す。エル・アルトの光以外何も見えず、はなはだ面白くない。

5900m 辺りから緊張箇所が連続するので、つらさは吹っ飛ぶ。ガイドのロープ捌きは良く、ほとんどコンテで動く。

5 : 20 頂上。真っ暗な頂上にもう 1 組と一緒に着く。GPS はすぐ消え、デジカメは動かない。何もすることがないので、ガイドに確保させて下を覗き込んだ後、早々と、しかし慎重に下山する。坂井には会わない。



GPS は羽毛のポケットで機能し、軌跡を記録していた。

難場は旗 633 と頂上直下である。

旗 630 から旗 632 の手前まではワイナポトシ小屋からトレースが見えたが、旗 634 を急登した後東面に回り込むので見えない。

少し明るくなったところで、デジカメが動き、イリマニを撮る。



HCに戻り、慌しく装備を整理し、ワイナポトシ小屋に下り、ラパスに戻り、一番ホテルに落ち着く。

10. チャカルタヤ宇宙線研究所 6月24日

事故で今回参加できなかった大塚の恩師が10年前まで30年間にわたり関わった研究所を Dr.Hugo 手配の車で訪ねた。

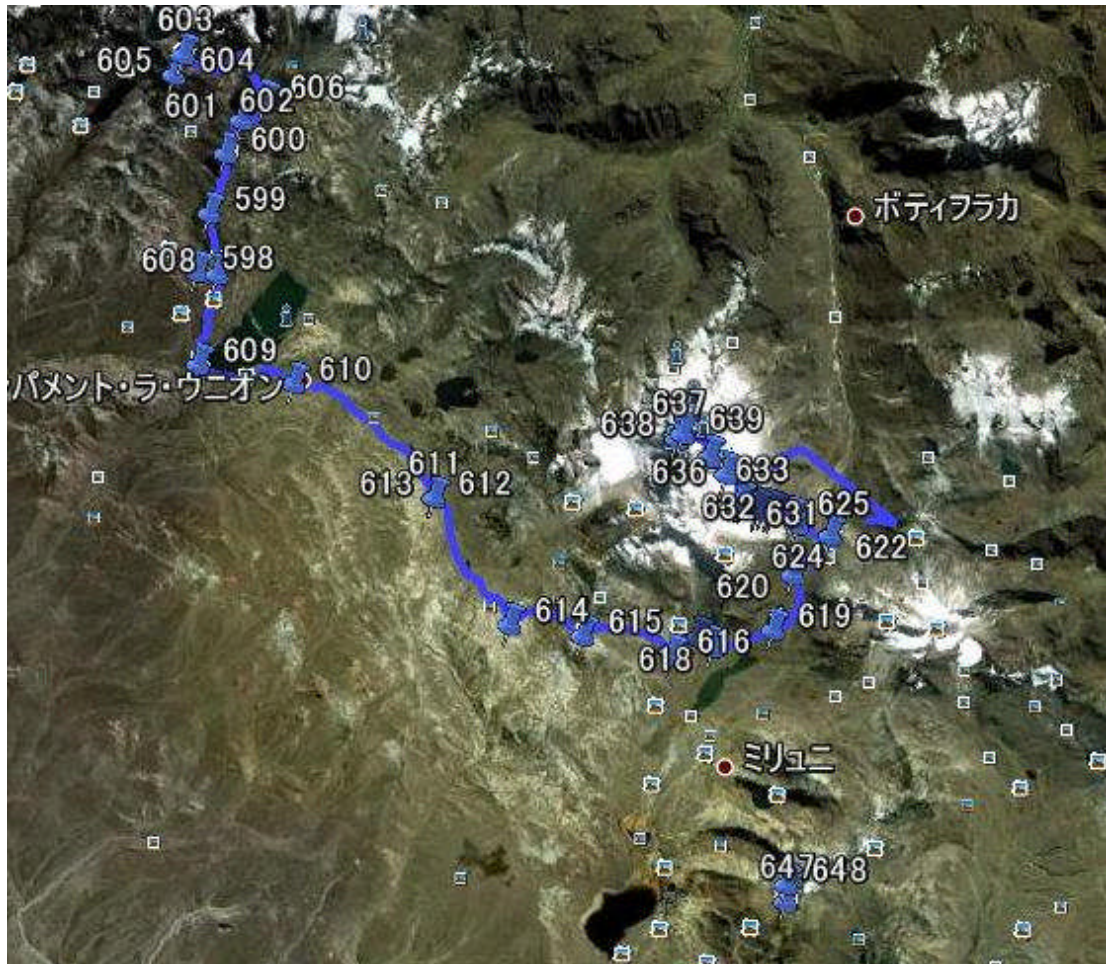
研究所の標高がすでに 5200m、すぐ側のチャカルタヤ峰(5395)には天候も良くなく登らなかった。



研究所の近くから遠くにイリマニを望む

1 1. 現地解散

次はこの個人山行の軌跡をまとめたものである。冒頭の地図のほんの一部であるが、核心部を歩いたことになる。



幸い天候にも恵まれ、ガイド会社、登山基地の一番ホテルにも大変お世話になった。
予定を無事終了し、現地解散した。

1 2. 参考

ア. 会への報告としてこのほか次がある。

坂井康悦「古希の挑戦 ワイナポトシ(ボリビア)山行記 雑感」シリウスジャーナル第32号

イ. 関係資料は4人で手分けして整理し、保管することとしている。公開はしないが、会員の便に供することはできる。

ウ. 現地解散後中道はイリマニに登り、またレアル山群を車で眺望し、これらを含め次に報告している。

HP「今、山へ」 イリマニ

(<http://imayamahe.world.coocan.jp/bolivia2406/mokuji.html>)